

文学に記述された住空間の評価の手法とそのプロセス

正会員 ○ 渋谷 佳克 *
同 若山 滋 **

1. 序論

家の生活環境としての特性は、人間がその生活を営むための場の意味であるがゆえに、生活と建築空間が相互に適応することの上に取り上げられる。その適応とは、生活者がその生活観によって建築空間を使い分け、生活環境に対して能動的に働き掛けながらも、同時に現前する建築空間の在り方によって自らの生活観をその環境に順応させることによって成される。¹⁾この様な、生活者とその環境とが相互に補完しあいながら成される家空間における生活は、「人間が環境の中に生きた関係をつかみ取り、出来事や行為の世界に意味や秩序をもち込もうとする要求」²⁾によって生起する。つまり人間は、家空間との関わり方の妥当性を生活の中で経験的に獲得すると同時に、その空間の生活環境としての意味を創造しているのであり、ならば、人間による生活行為は、それが成される家の空間的特性を示唆するものであると言えよう。

本稿は、家空間が生活環境として如何に構成されているかを、その時代・文化・社会を踏まえて把握し評価する手法の提案を目的とするものである。それは、実在的な建築空間と、それを人間が生活体験の中で捉える空間の両者を区別しない一体的把握のもとに、家の生活環境としての空間的構造とその意味が捉えられるとするものである。

2. 研究対象

この様な視点から、人間の生活が成される家内部の空間的特性をみていくのであるが、それは、主体的に成された体験に関わる事の評価であり、それを時代・文化・社会を踏まえて考察するには、その様に表現がなされた何らかの道具立てが必要となる。それに対し、文芸作品の中から、とりわけ小説を考察の材料とする。それは、芸術というものが「技術的な描出をもって、時代や文化に潜在している空間図式を顕在化する」³⁾という見解と同じ立場から、それを十分認識しているであろう小説家の空間表現が、時代・文化・社会の一つの典型を描出していると判断し信頼するものである。また、小説における空間の呈示は、その中心部として描き出される作中人物の心理や行動と、そのプロットの展開に対し、その「意味を限定し、鮮明な像として浮き上がらせている」⁴⁾舞台装置ともいうべ

きものとして成される。この様な文学の構造は、作中の生活者と家の関係によるものとしてみていけば、家の生活環境としての空間特性を人間の生活体験の同伴的存在として捉えていく本稿の立場と一致するものであり、そこに、本稿の立場から空間を考察する上で、小説が資料として適切な一つの事例であることを認めるものである。

3. 家内部における空間構成の把握

家の生活環境が、如何に構成されているかをみていくに際し、その様な家内部を構成する空間が、作中からどの様にして把握されるかを見ていこう。それは、「文学作品における空間の呈示のされ方に着目することになる。文学作品に呈示される空間は、呈示される対象物と伴に呈示されるのであり、この呈示される空間は作中で対象物を知覚する主体の視点の定位にしたがって表現されると考えられる。」⁵⁾この視点とは、文章表現上の対象物を知覚する語り手の視点である。そして、その語り手の視点によって知覚された対象が、家内部における行動主体としての作中人物であるとき、その人物の行為する舞台として現出する空間が、家内部の生活空間として呈示されたものであると位置付けられよう。

この様な生活空間による家内部の構成は、家内部における生活者としての行動主体が、移動するのに伴って順次呈示される空間同士の連続関係として把握される。その連続関係は、作中人物の移動という行為のベクトルに関係付けられた、その始点と終点に対応する行為の「起点となる空間」と「目標となる空間」との隣接関係である。そして、その行為の「起点となる空間」領域の境界を作中の行動主体が越えた時に、その身体が「目標となる空間」に存在することにより空間同士の隣接関係は確認される。

こうした家の内部空間の把握は、文学における「プロットのもっとも典型的な構成法は、空間の越境である」⁶⁾という考えに依拠するものである。その事から、越境という行為によって呈示された境界を共有する空間相互の隣接関係は、作品のプロットを最も反映した空間モデルを呈示すると言えるであろう。

作品にけるこの様な空間の隣接関係を捉えるための記述は、行動主体の行為やそれに伴う身体的もしくは知覚的な空間体験が、空間的かつ時間的に連続していると判断

The Technical Skill and The Process for The Evaluation of The House Space Described in Literature

SHIBUYA Yoshikatsu, WKAYAMA Sihgeru

できる記述のまとまりによるものであり、その様な記述のまとまりを、作中から家の内部構造を想起させる「文章ブロック」⁷⁾として抽出する。そうして抽出された「文章ブロック」から、把握された空間同士の隣接関係は、文学表現が「時間的な順序にしたがうかぎりで継起的」なのであり、「一目で全体が見渡せる絵画や彫刻とは対照的」であるという意味において、「作品の全体像に一步一步近づいて行く」中で、断片的に呈示された家内部の部分的構造と言える。しかし、「最終的に把握された各部分の関係は、非時間的に『そこにある』」のであり、作品の全体像は、物語の様々な段階で呈示された断片的な部分を総合することによるものであるとされることから、把握された家内部の部分的構造を総合したものが、作品全体から把握される家空間の全体像ということになる。⁸⁾

この様にして把握された家の内部構造は、作中人物の越境という行為の記述が呈示する境界の存在によって秩序立てられている。その事から、この家内部の空間構成がもつ特性は、境界の特性によって意味付けられていると考えられる。建築空間における境界の役割は、「空間を分節」する事とその分節された空間相互の「交換と媒介」であるとされる。⁹⁾ その内、「空間の分節」という役割を担う境界の存在を確認することにより、その境界によって分節された空間相互の隣接関係として家内部の空間構成が把握された。この様にして把握された空間構成において、隣接する空間同士の「交換と媒介」という役割を担う境界の特性とは、境界の存在によって秩序立てられた家内部の空間特性を示唆するものであると言えよう。

4. 空間特性の評価

では、隣接する空間同士の「交換と媒介」という役割を担う境界の特性は、いったいどの様にして把握されるのであろうか。それは、この境界が、作中人物による「空間の越境」という行為によって成されたものであるがゆえに、作中の行動主体による、その越境という行為とその際の空間体験から考察してことになる。

前節において述べたように、越境という行為に着目したのは、作品のプロットを踏まえて家内部の空間構成を把握するためであったが、何故に「空間の越境」という行為が、「プロットのもっとも典型的な構成法」になりえるのかという事についても述べておく必要がある。それは、「境界を通過することの不可能性が存在する」という理由によるものとされる。¹⁰⁾ つまり、人物の空間から空間への往来に対する境界の抑制作用が、越えるという行為に事件性を付与するのであり、それが、物語のプロットを展開するというのである。ならば、そのプロットを最も反映する様に「空間の越境」により把握された家内部における空間構成の特

性は、空間から空間への人物の往来に対する境界の抑制作用によって特徴付けられていると考えられよう。

5. まとめ

本稿は、人間の生活とそれが成される生活環境との関係の上に、家の空間的意味を捉えることを目的とし、それを文学作品に記述されたものから把握する手法を考察してきた。文学の記述の構造とそのプロットを考慮して把握される家の空間図式は、作中人物の「空間の越境」によって呈示された境界によって秩序立てられたものとして把握されることが明らかとなった。そして、この様に境界に基づいて把握された家内部の空間構成から、文学に記述された家空間の特性を、境界の特性として考察していくプロセスが見出された。

【註】

- 1) ジャン ピアジェ 訳 波多野完治・滝沢武久「知能と生物学的適応」:『知能の心理学』みすず書房 1998年10月20日 p.10-p.42
- 2) ノルベルグ シュルツ 訳 加藤邦男「さまざまな空間の体系」:『実存・空間・建築』鹿島出版会 1997年1月30日 p.13-p.21
- 3) 原広司「空間図式論」:『空間<機能から様相へ>』岩波書店 1991年4月24日 p.177-p.208
- 4) 前田愛「空間のテキスト テキストの空間」:『都市空間の中の文学』筑摩書房 1984年1月20日 p.5-p.6
- 5) ローマン・インガルデン「呈示される対象像の空間的方向づけの種々の仕方」:『文学的芸術作品』勁草書房 1998年5月25日 p.196-p.198
- 6) Yu. ロトマン 訳 磯谷孝「文化のタイポロジー的記述のメタ言語について」:『文学と文化記号論』岩波現代選書 1979年1月25日 p.283-p.311
- 7) 大江健三郎
- 8) 前田愛「空間のテキスト テキストの空間」:『都市空間の中の文学』筑摩書房 1984年1月20日 p.27-p.35
- 9) 原広司「境界論」:『空間<機能から様相へ>』岩波書店 1991年4月24日 p.131-p.176
- 10) Yu. ロトマン 訳 磯谷孝「文化のタイポロジー的記述のメタ言語について」:『文学と文化記号論』岩波現代選書 1979年1月25日 p.283-p.311

【参考文献】

- 『生きられた家』多木浩二 青土社 2000年3月30日
『新しい文学のために』大江健三郎 岩波新書 1996年5月15日
『小説の方法』大江健三郎 岩波現代選書 1998年9月7日
『言葉とは何か』丸山圭三郎 夏目書房 1995年8月1日
『現代思想入門』小坂修平 竹田青嗣 志賀隆生 他著 宝島社 1996年5月25日
『建築・都市計画のための空間学辞典』日本建築学会 井上書院 1996年11月15日
『集落の教え100』原広司 彰国社 1998年3月30日

* 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院・修士(博士)
** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Graduate Student, Nagoya Inst. of Technology, M.Eng
Prof., Nagoya Inst of Technology, Dr.Eng